

# 「教える」の 基本精神のとおり、 生徒と真剣に向き合った 指導が行われています



富士学院参与  
**蓮池 隆** (はすいけ たかし)

Profile

昭和54年4月に学校法人愛知医科大学に入職。長らく学生課長として入試業務、入試広報及び学生生活の支援業務全体を担当し、平成22年に医学部事務部長に就任。入試関連業務、教務関係業務、教授会運営など医学部全般の事務責任者として活躍した。またその間、社団法人日本私立医科大学協会教務事務研究会の副委員長、委員長を歴任。大学を退職後、平成30年に参与として富士学院に入職。現在に至る。

愛知医科大学の事務部長として、また日本私立医科大学協会元教務事務研究会委員長として、医学・医療の世界で活躍してきた蓮池氏。その蓮池氏は、今、医学部専門予備校の富士学院に参与として日々活動をしている。その蓮池氏に富士学院や、今の医学部について語ってもらった。



大学毎で行っている、富士学院を卒業した新入生を先輩OBやドクターに紹介するOB懇親会の模様

ことに驚かれたようですね。

富士学院に入職して、当初は予備校にOB会があることを不思議に思っていました。しかし、昨年の9月下旬に大阪で同地区のOB会が開催され、私も参加させていただいたのですが、学んだ校舎や進学した大学もそれぞれ違うなか、OB一人ひとりに富士学院で学んだことでの一体感があり、すごく盛り上がった会合でした。

医学部受験では、浪人して予備校で同じ目標に向かう仲間、将来に亘って良き友人になります。将来医師として活躍するときに

## 「教える」本来の教育と 真剣に向き合う富士学院

まず、富士学院との出会いを教えてください。

私が「富士学院」という予備校を認識したのは平成12年でした。大学の入試担当者として全国の予備校を訪問していましたが、事前連絡をしておきませんでした。そのなかもしれませんが、きちんと丁寧に対応していただけた予備校は多くありませんでした。訪問して最初の窓口対応でそれなりに雰囲気は分かりましたが、富士学院は、いつ訪問しても丁寧に対応していただける予備校の一つでした。

大学職員として、今まで大勢の医学生に接してきましたが、中にはモチベーションが低く、何年も留年する学生もいました。学生に対して一番必要なことは、しっかりと目標を持たせ、根気強く面談や指導をすることですが、これはなかなか難しいことです。しかし、富士学院の一員になって分かったことですが、それが富士学院では、当たり前のように行われていました。このことは、学院の基本精神である「教える」に全てが含まれているのだと思います。最初からすべてが出来る生徒は少ない中、そのような生徒に対しても、真剣に向き合って「教える」ことが行われていることに驚きました。

## 単なる医学部合格 だけではなく その先を踏まえた指導

実際に仕事をしてみても、医学部予備校業界や富士学院について、もう少し詳しくお話していただけますか。

最近、驚いていることがあります。それは、大学職員として長年訪問していた医学部進学予備校が数か所閉校していたことです。以前は生徒数も多く、大変活気があった予備校が姿を消しているのです。今、医学部進学予備校は、淘汰され大きな転換期を迎えているのかもしれない。

平成30年度の医学部入学志願者数は、学校基本調査によると、国立大学では25,821名、公立大学4,549名、私立大学112,957名、合計143,327名でした。医学部入学志願者は9,002名で単純な倍率は16倍弱で、依然として非常に高い倍率です。

18歳人口の減少、医学部入学定員の増加など様々な問題もありますが、この受験倍率の傾向は今後のことも変わらなそうです。このような状況だからこそ予備校側が社会の動向を見極めながら受験者等のニーズにしっかり応えられるよう努力していかなくては

は、進学先の大学は別でも同じ医師として出身大学を越えて、いろんな場面で協力し合うことも推測されます。医療業界の様々な問題等の情報交換ができる組織として、富士学院OB会は、いずれその役目を担うと思います。OBは全国各大学に入学し、各地の病院で医師として勤務することになります。各大学の医学教育や医療現場の現状や課題をOBからの情報を基に医学部受験に活かすことができます。また、OBに対しては学院としていろいろな支援ができると思います。今、各地で開催されているOB会を組織的な体制として、大学や地域ごとに組織を構築し、それを統制する組織ができれば将来いろいろな可能性を秘めた組織になると思っています。

## 患者に安心感を与えられる 医師が求められる

今求められる医師像について、どのように考えていますか。

医学部入試では、学力の高さだけでなく合格するには限りません。面接、小論文で適性をしっかりと確認されますので、特に面接対策は1次試験が合格してから行っているに付け焼刃的になり、医師に必要な資質を表現できず評価が低くなります。富士学院では、入塾と同時に医師になる目標の設定やモチベーションを高める指導を講師や職員が生徒と一緒に考えて

います。生徒自身が目標を明確にし、自覚や覚悟ができれば勉学の効率も良くなり、それが合格という結果につながっているのだと感じています。今、本当に求められている医師は、医療技術・手技は勿論ですが、患者やその家族とのコミュニケーション能力が上手な医師であることだと思います。コミュニケーション能力は、医療に特化した能力ではなく、社会一般でも必要な能力であり、人の気持ちを思いやることができ、謙虚な心を持つことができて、謙虚な心を持つことができて、患者に安心感を与えられるよう相手の立場に立って丁寧に対応することがとても大切だと思いますので、そういう対応ができる医師を目指してほしいです。



生徒を指導する各科目の講師や職員が、チームとして一人ひとりの生徒を応援

ならないと思います。しっかりとした理念を持って、社会や大学から求められる人材として育て、受験者やその保護者から信頼される指導をすることが大切です。富士学院にはこれらのことがしっかりと根付いています。富士学院は、入塾テストを行わず、医学部進学希望者で意欲があれば全員入校させており、その中でこの医学部合格率は素晴らしい数字だと思います。これを更に向上するべく努力することが私どもの使命と感じています。予備校は大学に合格するための施設であり、大学に苦勞して入学しても1年次で留年する学生が全体の約5%、3、4年次に留年する学生も非常に多い状況です。医学部に合格するために周りの人々から多くの支援を得て、涙ぐましい努力して入学したにも関わらず最初から躓いている学生がいます。富士学院では、入塾して医学部受験までに将来の目標を明確にして、単なる医学部合格を目指すだけでなく、将来の自分自身の目標をしっかりとたせる指導をしています。富士学院で学んだ生徒は、大学で留年することなく将来に向けて一直線に進んでいると思います。

## いろいろな可能性を秘めた 今後のOB会の存在

富士学院には予備校にはめずらしいOB会があります。その研修医になってからも重要な要素です。私も富士学院の一員として医学部入学を目指している生徒を出来る限り応援したいと思っています。富士学院と一緒に頑張りましょう。



コミュニケーション能力を高めるために、必要に応じて随時行われる面接指導